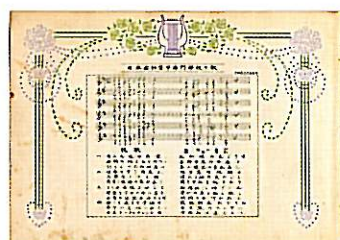
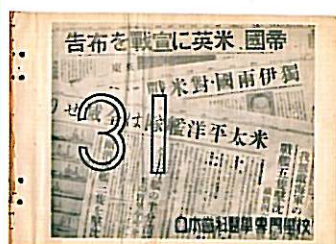


日本歯科大学

校友会・歯学会 会報



VOL.32 NO.4

2007年5月

- 〈連載・100周年記念企画〉100年の歴史／第8回 歯科麻酔学
- 校友多才人列伝・第16回（最終回）
大学人、医人、画人 中原 實 先生（4回卒）
- 第96回卒業生名簿

積層充填による包括的臨床



東京都開業 中原悦夫

1. 無機的な修復材料が有機的に活躍

ダイレクトボンディングは治療の過程で積層したり割合したり自由自在に形態を変えられることから、ただ単に無機的に審美的な修復をするのではなく、歯根膜、歯槽骨、そして歯肉といった歯周組織全体を有機的に捉えた上での修復を可能にしている。その結果、長期的に安定した咬合状態を確立し、治療全体で見るとMIに則った斬新な治療となり得る。

2. ダイレクトボンディング

積層充填とはあくまでもレジンの硬化収縮による接着面の剥離を防ぐために何層かに分けて充填するコンポジットレジン修復の一テクニックに過ぎないが、さらに本来の歯冠形状を超えて積層できるのがダイレクトボンディングである。そうすると修復以外に補綴、歯周病、矯正、インプラント、予防、そして咬合といった包括的な知識も必要になってくる。特に理解しておかなければならないのは、歯肉マージンにあたる位置からの立ち上がりのエマージェンスプロファイル、歯冠の豊隆のエステティックピークならびファンクショナルピークに関する点である。

3. ダイレクトボンディングテクニックのポイント

色彩マップの作成に始まり、ワックスアップ、モックアップの作成といった術前準備を念入りに行うことが作業を短縮する上での決め手となる。口腔内ではパテ印象材や透明シリコン印象材の積極的な活用により、術前のシミュレーションに限らず近い形態を再現することができる。その

他、コンタクトポイントの付与にはストリップスより隣在歯を使用するほうが確実である。このようにちょっとした工夫が従来のレジン充填とまったく違った機能を引き出し、治療計画を抜本的に変えてしまう大きな魅力が潜んでいる。

4. オーラルデザイン

歯冠形態が回復された場合の咬合回復と咬耗したままでの咬合回復では長期的に観ると大きな違いがあり、矯正診断および長期的な治療計画に大きく影響してくる。

例えば、ブラキシズムにより咬耗した歯冠に対して矯正中の適切な時期にダイレクトボンディングを用いて歯牙本来の形態を徐々に回復させながら進めることで、成人矯正においてもより理想的な咬合を構築することができる。つまり、矯正、歯周、補綴といった包括的治療のプランニングにおいて最終補綴による歯牙の切削を最小限に止めることができ、あるいは補綴処置を回避する可能性も出てくるのである。このように、ダイレクトボンディングは他の専門的治療との橋渡し、あるいはシミュレーション機能を兼ね備えていると同時に、プロビジョナル、永久修復、あるいは永久補綴の機能も兼ね備えた材料でありテクニックである。

参考文献

- 1) 中原悦夫：ダイレクトボンディングとオーラルデザイン，日本歯科評論Vol. 65 No. 9 (2005-9)。
- 2) 中原悦夫：ダイレクトボンディングとオーラルデザイン 続編，日本歯科評論Vol. 66 No. 2 (2006-2)。